

東日本大震災遺族における「死者との相互行為」

—岩手県大槌町での経験を中心に—

麦 倉 哲*

はじめに

この論文の目的は、死者との対話をもつ意味を社会的に明らかにすることである。人は、生きている他者とのみ対話しているわけではなく、亡くなった方とも対話している。身近な死を経験した被災者が、故人とどのように向き合ってきたかを、大量観察調査と、ケース調査の結果から明らかにするとともに、著者自身がフィールドワークを通して死後の他者と向き合ってきた経験から考えたい。

1. 犠牲となった方がたの鎮魂・慰霊

本論では、データとして、著者が2011年から2016年の5年間に取り組んできた各種調査結果を活用する。大槌町避難所リーダーインタビュー、大槌町仮設住宅入居者調査、東日本大震災犠牲者遺族へのケーススタディ、吉里吉里地区死亡状況調査、吉里吉里地区避難行動調査等である。著者が多様な生存者や悲嘆者と交流を結んできたフィールドワークによってえられた参加（関与）型調査の結果も、本論文の分析の対象である。

大槌町仮設住宅入居者調査では、みなで取り組む復興のまちづくりについて、何が重要かをきいている。「地域における交流の活性化」「まつり・伝統行事などの地域文化の復興」「防災の文化を受け継ぐ」などの項目の中で、「犠牲となった方がたの鎮魂・慰霊」（以下「鎮魂・慰霊」）が選択される比率は、他の2、3の項目とともに、高い比率を示している。2014年に前年比で幾分下がった比率（37.6%）は、2015年には回復（43.5%）している。2011年からの調査で「鎮魂・慰霊」の事項は、全体の順位における微妙な変動の中で、2位くらいをキープしていることが多い。2014年から2年間の間に、「生きた証プロジェクト」の町の公式事業化、それを主導した碓川豊町長の落選、その一方で聴き取りの進展、聴き取り調査を主導してきた岩手大学への委託の打ち切り、新たな始動などなど、犠牲となった方がたをめぐる町内の変転がある中でも、「慰霊・鎮魂」への意向は、大きく変わることはなく、被災住民にとって重要な事項と認識され続けている。

* 岩手大学教育学部社会学研究室

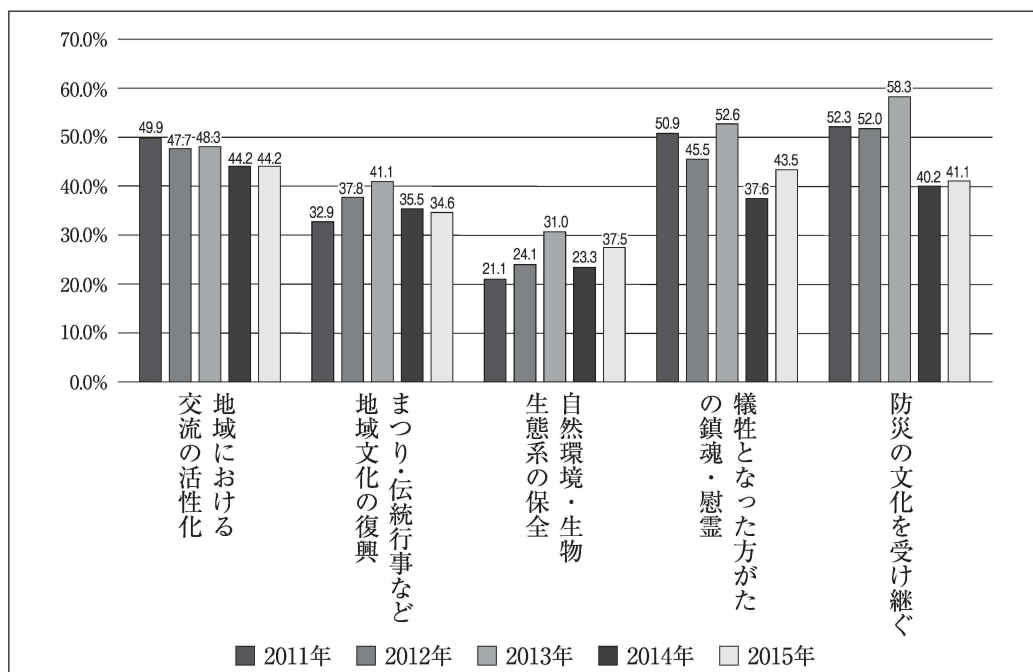


図1 自分自身に関わる復興のまちづくり
 —「大槌町仮設住宅入居者調査」(2011～2015年：岩手大学)より

表1 自分自身に関わる復興のまちづくり：比率1位と2位*

年	地域における交流の活性化	まつり・伝統行事など地域文化の復興	自然環境・生物生態系の保全	犠牲となった方がたの鎮魂・慰霊	防災の文化を受け継ぐ
2011年	49.9%	32.9%	21.1%	②50.9%	①52.3%
2012年	②47.7%	37.8%	24.1%	45.5%	①52.0%
2013年	48.3%	41.1%	31.0%	②52.6%	①58.3%
2014年	①44.2%	35.5%	23.3%	37.6%	②40.2%
2015年	①44.2%	34.6%	27.5%	②43.5%	41.1%

—「大槌町仮設住宅入居者調査」(2011～2015年：岩手大学)より
 *表中の丸付き数字①②は、当該年の比率の順位を示す

2. 人口の4層と魂人口

大切な家族や近親者を亡くした人は、「あれ以来変わってしまった」人生のステージで日常を生活している。死をどのように受けとめるか、故人を亡きものとして生きていけるのかなど、数かずの自問自答を繰り返し、時に亡き人の魂に問いかけている。遺族の心の復興は容易ではないものの、地域社会の内外から受ける「早く元通り元気になってね」のような独特の社会的プレッシャーもある中で、遺族にとっては、死者との対話の継続が一定の大きな意味をもっている。

るのではないだろうか。いつか必ず家に戻ってくるだろうと期待する人、姿の見えない故人が以前と変わらず家にいるものとして暮らしている人、故人の遺志を継いだり、故人の意向に沿って暮らそうとする人、夢に出てきた故人から励まされる人、故人が眠るお墓に向かって叫ぶ人、故人の気配を実感している人、故人がみえる人、故人が犠牲となった場所（旧役場庁舎ほか）に通い続ける人、犠牲となった人びとに見守られていると実感する人などなど。

私自身、実際のところ、多くの故人に観られているのではないかと、見守られているのではないかと想像しながら、大槌町での6年目の聴き取り調査活動や、訪問寄り添い活動や、サロン活動に取り組んでいる。町の入り口で、町全体に向かって、というより主として「魂の人口」のお歴々にご挨拶し、町を出る時には御礼の気持ちで後にする。ガレキが撤去されたあとのランドウのような風景には、実はたくさんの魂や念（無念や祈念など多様な念）が存在しているのではないかと思われ、さびしいとか何もないようには思えなかった。

石巻市でタクシー運転手の証言を社会的に考察した、東北学院大学の金菱清教授と金菱ゼミ学生の調査では、タクシー運転手の霊魂との対話が紹介され考察されている。同様のことは、大槌町でもうかがえる。釜石市から乗客を乗せて大槌町へ入る運転手は、国道に沿って進み大槌町へ入った直後の信号で何かを目撃するという。そこは、古廟坂トンネルを過ぎた場所で、国道の右側まで津波が押し寄せ、多くの犠牲者が出た場所である。

2011年から2017年1月の本稿執筆の時点まで、解体するか災害遺構として残すかで揺れる大槌町旧役場庁舎問題がある。災害の教訓として目に見える形で遺構として残すか、建物を見るにつけつらい気持ちになる人がいるから解体撤去するかで立場が分かれる。その役場庁舎を見上げると、まだ働いている人がみえるという人がいる。2011年から着手した岩手大学仮設住宅調査で出会った方である。私には見えないが、見えるその方によれば、その人はコピーを取るなど働いているという。その人が、今回の東日本大震災で亡くなった方かどうかは断定できないが、その話をうかがってから私は、旧役場庁舎の前に設けられた献花台に向かって、「安らかに眠ってください」という祈りではなく、「お疲れ様です」と声をかけ手をあわせるようにしている。自分が亡くなったこともわからずに働いている人がいるくらいだから、早く旧役場庁舎は解体すべきだという意見もあろうが、せっかくなら働いているのだから、いまでも働いている場をうばうことはないだろうという意見もあろう。もう少しつぶさにみれば、その人がたんに幽霊として恐れられる存在ではなく、具体的にどの人なのか察しがつき、霊的な存在として供養の対象となり、私たちに何かの教訓を伝授してくれる存在なのではないかと思える。かくかくしかじかの災害に見舞われその人が亡くなったことや、その人が実に無念の気持ちを持っていることなど、対話のようなことができるのではないかと。少なくとも、今を生きて続けている人（残されている人）は、大災害により犠牲となり、遺されなかった人（魂の人）を相手に、対話のような気持ちで接することが妥当なのではないか。生者と死者の両者には心の対話が成立するのではないかと思うのである。

この対話には、故人とその遺族や従前の近親者以外の人びとも加わりうるのではないかと。大災害の場合、犠牲となった最大の要因は社会の脆弱性であり、多くの人びとの営みや瑕疵の結果が、犠牲死と関係している。私も対話に加わろうとして被災地へやってきた。大災害の犠牲となった方の仏壇では、どんなにつらかったろうか、無念であったろうかと思いをはせ、自分が被災後に来た者で、「あなたが亡くなってから、このように手を合わせに来ています」などと自己紹介をしている。私に限らず非常に多くの多様な立場の人が、犠牲者の死と向き合うため

に、被災地へ足を運んでいる。

大震災に見舞われた町は、たくさんの被災犠牲者を出し、各種の生存の基盤も多大な損傷を受け、端的に言えば、人口が急減した。被災死者で人口の約1割（約8%）が減少し、被災後の避難や住や産業の基盤の喪失や損壊によりもう1割ほどが減少するという影響を受けている。2010国勢調査と、2015年のそれとを比べると、23%の減である。町内に住民票を置き、実際は避難生活を送っている人を差し引けば、減少はさらに顕著とみられる。三陸の被災地域から内陸へ避難している人を対象とした岩手県の調査によれば、元の市町村へ戻りたいという意向の人の比率は低下傾向にある。

他方で被災地には、復興の助力になると、たくさんの縁が生まれ、支援の輪が広がり、志のある人が押し寄せ、交流が生まれている。被災地での人口は減少しているものの、減少しているのはいわゆる「夜間人口」のことであり、住民票を置く人の住民人口のことである。しかしながら、別の次元でカウントするならば、人口の増減は、別の見え方で考えられる。

私が考えるの人口の5層構造は、夜間人口、昼間人口、ふるさと人口、関心人口、魂人口である。第一は、普通に考えられる人口であり、ある人は、どこかの唯一の箇所に住民の資格を有するという一元主義に根差している。次の3種類は、交流人口という大きなくりに入る。

交流人口の古典的な主流は昼間人口で、仕事や学業など義務的なジャンルの活動が含まれる。しかし、人びとは義務的な活動のみならず、自発的な関心により居住地以外で活動する、あるいは地域を超えて幅広く活動する。都市的生活様式では、興味をそそられる地域へと活動域を広げていく。関心人口がこれに当たる。そして、「ふるさととは遠きにありて思うもの」というだけでなく、現在の居住地とふるさとを頻繁に往復するライフスタイルや、物理的には頻繁に往復しないものの、ふるさとへの関心を持ち続け、ネット経由なども含めて関わる人びとがいる。東日本大震災の被災地が、過疎地域を含む漁村地域であり、ふるさとを出て今は大都市で暮らす人びとの郷愁を誘った。自分自身の幼少期や成長期を、定位家族や地域社会の人びとに支えられ、野山や河川や海の自然に包まれ、育てられた地域に郷愁を抱き、心のよりどころとしてきた人びとである。人はふるさとを意識し、その地の動向に思いをいだし、なんらかのかかわりをもとうとする対象とする。過疎地となり、目に見える人口は減っているものの、そこへの郷愁をいさぐふるさと人口は、意外と少なくないのである。

そして、魂の人口。多くの人びとの生死が繰り返された場所は、現にいま生きている人びとだけで占められているとは思えない。大災害のような天変地異に見舞われ、非常に多くの生命が一挙に亡くなった被災地域などでは、自身の生死も十分にわからずにいる存在や、さまざまな思いを残し、無念の気持ちを抱き、また現にいる存在の人びとに何かを託そうとする存在が、さまざまなかたちで残っているのではないだろうか。ある人にはその様子が断片的にうかがえ、またある人にはまったく見えない。大災害の被災エリアでは、霊的な存在につとめても、磁場が形成されているのではないか。

大災害のあと、ガレキが撤去され、更地となった被災地には、何かたくさんの物や事や念や魂が詰まっっていて、見え隠れしているのではないか。現に物理的に、物を動かし、有機物を組成分解している生き物たちや、生き残った人間たちの様子を、見守っている存在があるのではないか。その数は決して少なくなく、たくさんの存在があるのではないか。そうした魂たちのことを思い浮かべてながら、私たちは、復興というテーマを掲げ、自分のいま生きている意味を問い続け、何らかのお努めをしているのではないか。そう考えるのは不思議でもあり、また

不思議ではなくあたり前なのかもしれないのである。私たちは、魂の存在の人びとと、心の対話を続けているのではないか。

表2 人口の4つの次元 1

2分類+1	4次元+1	特性	備考
住民登録人口	夜間人口（住民人口）	住民票を置く唯一の場所	
交流人口	昼間人口	仕事や学業その他のことで、当該地で活動する人	通学・通勤者、移動者
	ふるさと人口	ふるさとと行き来、思いはふるさとにある人	1ターン人口、生まれ故郷、第2、第3のふるさと
	関心人口	当該市町村に関心を寄せる人	支援者。例えば、吉里吉里国のパスポートを持つ人など
霊的存在	魂人口	魂としてのみ存在する人口	風となり星となり

3. 故人に対して、故人を思って営む3つの次元の行為

亡くなった人に対して、その遺族や近親者たちは、①忘れない、②供養する、弔う、③受け継ぐの3つの次元で、様々な営みや取り組みをする。

表3 遺族と故人の交流

1 忘れない	2 供養する(贈る), 弔う	2' 供養の展開としての交流		3 受け継ぐ	4 不思議なこと, その他
		交流1: 夢	交流2: 気配		
故人と同居しているかのように今もくらす	故人の供養のためにしていること	故人の夢をみる	故人の気配を感じること	故人の遺志を受け継ぐ	大地震の前の出来事と、その後に起こったことのつながり

亡くなった人と近親の関係にあった人である遺族や、故人と親しかった知人は、亡くなった人のことを忘れたくないと思い、故人が今も存在するかもしれないという思いを抱き暮らし、故人のことを思い出したりしている。また、故人の死を受けとめつつも、死を悼み、供養するために、冥福を祈ったり、感謝したりしている。また、故人の想いを想像したり、故人の遺志を汲んで、受け継いで、何かの取り組みをしたりしている。たくさんの生命が犠牲となった被災地では、たくさんの故人と、遺族や関係者の間で、多様な営みや取り組みが行われている。

しかしこの営みや取り組みの中で発生する現象や経験の中には、故人との相互行為を想起させるものが多少なりとも含まれている。故人のことを夢にみたり、故人の気配を感じたり、故人から見守られているように実感したり、何か不思議な体験をしたりといった遺族らの経験には、遺族らと故人の間でなんらかの相互行為が発生しているようにも思えるのである。

そこで表3には、①忘れない、②供養する、弔う、③受け継ぐの3つの次元に加えて、供養することの相互行為的な展開として、交流1「夢」と交流2「気配」を加え、さらに「その他

不思議なこと」を加えている。

この6年間、東日本大震災の被災地の調査をしていて、「死者との対話」のようなことを考えるようになったのは、故人を想像したたくさんの、故人向けの営みや取り組みが行われていることと、故人や近い知人が経験してきたことの中に、故人によるなんらかの反応と解されるものが少なからず含まれているからである。

死者と遺族との間で関係が生ずるのは一般的なことであるが、東日本大震災被災地のような、たくさんの遺族や知人と、故人との関係が発生しているところでは、死者と生者との関係が、集中的に覚醒されているので、この両者の関係の間のことを、数多くの人が察知したり、想像したり、思念したりするように、開かれた場が形成されているように思えるのである。

4. 公共圏の形成

多数の犠牲者を出した地域においては、突然の、たくさんの、身近な死が経験され、故人—遺族の関係の範囲を超えた、社会的な出来事として広く共有された。

(巨大な) 加害力によって遺族が受けた経験は、大切な家族が犠牲となるという喪失である。しかし、悲嘆する遺族は孤立しているばかりではなく、周辺にいる人が加わりともに弔い、遺族ではなくとも悲しみを共感し、経験を共にする。通夜や葬式など、故人に手向ける諸もろの儀式は、家族の境界を越えて親族や地域共同体のメンバーなど、周囲の人の関わりにより運営されるがごとく、家族が受けた悲嘆や故人に向けて行われるセレモニーには、周辺の人びとが加わる。大災害の場合は、家族や親族や地域共同体のメンバーを含めて、犠牲となる範囲が広がる。そこには、周辺にいる近親者とは別に、志のある人びとが参列することがしばしばみられ、悲しみを受けとめる範囲は広がる。大震災では、遺族を支える周囲の力もしばしば脆弱となるために、血縁や地縁に加えて、少し範囲が拡張する社会縁が加わる。災害の様相を注視していた、志のある人が加わるのである。

大切な家族を亡くした遺族の経験は、犠牲の直後から引き続く一連の儀式が終わることで、すべてが片付き、終焉を迎えるわけではない。喪失した後の長い精神生活を営まなければならない。こうした遺族らの心情を悼み寄り添う人びとが、親族や地域共同体の中にもみられ、他方で、志のある人びと中にもある程度みられるようになる。遺族らは、自分自身の喪失体験と向き合い、死者との対話に向き合いつづけるが、こうした遺族には、そうした新たな生き方に共感し共鳴し、その生き方を支え、価値づける方向で精神的な支えとなるあらたなつながりが、他の生者との間にできるかもしれない。身近な生命の喪失を受けとめそれと向き合いつつ、新たな自分自身の生き方を模索する人びとは、あらたなつながりによりえられた他者との共働により、その後の人生を歩んでいくであろう。大災害の場合は、犠牲死をもたらした諸要因の検証が不可欠で、社会的な要因が究明されることが期待される。災害における死は社会的な死である。死の意味を究明することは社会的な営みであり、そのいわば中心に位置する遺族は、様々な支え手や共感者や共働者をえて、社会を再構築する公共圏を形成するに資するかもしれないし、地域社会の持続性を回復するためにも貴重な中核的な当事者であるといえる。

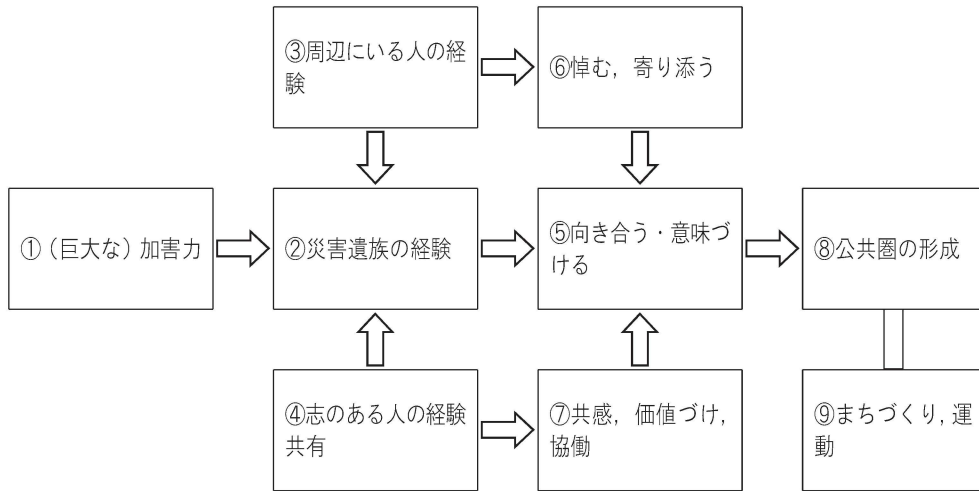


図2 多様な人が関わり寄り添う図

5. 相互行為としての側面

死者との対話には、2つの意味で相互行為の広がりを見出すことができる。一つには、第三者が加わることであり、二つ目には、故人からのリアクションが見られると思われることである。遺族らには、寄り添い者が加わり、また故人との相互行為が見られるのである。

表4 遺族と寄り添い者と故人の相互行為

基本コンセプト	遺族を中心にみた展開	<遺族の枠を超えた>寄り添い的な関係範囲の(一時的, 継続的な)拡大	故人からの作用・反作用(リアクション)がある
① 忘れない	忘れてはいけない(⇔忘れない)という感情から決意し、意識して思い出したり、何かに反応したり、取り組んだり、メッセージを送り、何かの物に投影したり、記録をのこそうとする <モノ, 言葉, 事柄化>	遺族の気持ちに共感する, 遺族の範囲を超えた忘れないための営みをする 遺族個人, 家族を超えた関係地域を超えた寄り添い者 釜石仏教会, 風の電話(漂流ポスト・陸前高田), 岩手日報「忘れない」, 朝日新聞「生きた証一生きてる証」, 碓川豊前町長「一人ひとりの記録」, 岩手県民「亡くなったのは一人ひとり」, 岩大・防災研ほか「死亡状況調査」, 東大窪田研ほか・・・本件に注目するメディア各社	見守る
	対話を意識した営為 写真・位牌を持参 何かにつけ語り掛ける		返事がある 風が吹く・自然の反応がある 昆虫等何か化身による反応

②供養する(弔う)	故人を想い何かを営む契機を習慣化し、定期化、定式化する 何かを祀ったり、場を訪れたりする	遺族の悲しみに寄り添う、慰める共に供養する (故人を送る・故人へ贈る言葉を、遺族・関係者から聴き取り、故人のことについて夢見ること聴き取り。慰霊碑・記念誌をつくって故人を弔う。これらは、死者との個人的あるいは集合的な相互行為である)	見守る
	対話を意識した営為 位牌・遺影・仏壇・お墓に語り掛ける 演奏をささげる		返事がある 風が吹く・自然の反応がある 昆虫等何か化身による反応
②の延長としての交流1 <夢>	夢をみる 夢で会いたい 見た夢の中で尋ねる「今どこにいるか夢で尋ねた」	遺族でなくとも故人の夢を見る	夢で吉里吉里駅 夢で大槌小ランド 夢で悲嘆する遺族を心配する。靈感の強い人の夢に出て遺族を頼むと伝言
②の延長としての交流2 <気配>	気配を感じる 何かを媒介に会う 実際に見る、会う、話す 何かをしてきている	気配を感じる、見る、話す	災害直前、亡父が帰れと警告。ご詠歌を歌う姿が目撃される。海のほうへ浜の匂いがして仮設に現れる。姪の子の枕元に立つ
③引き継ぐ	何かを受け継いでいこうとする。いのちのバトン受けて次につなぐ。	故人の遺志について受け止めていることを聴き取る。故人の死亡状況を調査し、死亡の要因・社会的脆弱性を検証する。災害の教訓を引き出し後世に残す	
	対話を意識した営為		見守る(応援する)
④不思議なこと	震災前にあったこと、起こったこと 震災前に故人が言ったこと 避難の最中に起こったこと 震災後に起こったこと 現在の日常に影響を受けたと思うこと、感じる		(役員として功績ある) 父を役員にしていた会社が躍進(死後に役員として功績を上げる)

表4は、①忘れない、②供養する・弔う、③受け継ぐの3つの営み以外に、相互行為的な交流が含まれる。②供養するの延長としての交流1「夢に見るー夢に出る」、交流2「気配を感じるー気配をにおわす」(見るー現す)、そして④「不思議なことその他」である。死者との対話は、故人と向き合う遺族らが主体となる側面以外に、故人から由来するかのような現象がたくさん起こっている(起こっているように意識される)という面がある。周囲の人や寄り添いの

人も加わり、社会的な様ざまな取り組みが継続している。その一方で、故人からの様ざまな作用や反応がうかがえる。一時的にか継続的にかにかかわらず、以上のようなコミュニケーションの状態が活性化し、場合によっては積極化する。

そこから、ある種の行為の価値が確認されたり、相互行為のリアリティが顕在化する中で、この時代の文化の一部が維持継続されたり、あたらな文化が創造されたりしながら、それ相応に復興文化が継承されていく可能性がある。とある人の感受性が刺激され、多くの不思議なことが、直接的、間接的に体験されるのである。

そうしたことを、社会学的にどのようにとらえていくのかは学問的な課題であり、拡張した当事者たちの営みが続く世界をどのように学問的に説明できるのだろうか。死に関する社会的な営みを、ごく狭い遺族の範囲に限定しないこと、ある専門家の意味づけや儀式に閉じ込めないこと、犠牲の社会的意味に対して政治的に支配しないことなど、その可能性について社会学的に検討することが重要である。

6. 死者との対話、死者との相互行為

(1) 忘れない

自分に近い人や大切な人を亡くした遺族らは、その死について忘れたいこともあるが、忘れたくないこともある。忘れたくないために、いろいろとすることがある。何かのかたちにしたたり、忘れないことを日常化したり、定期的な儀式をしたりする。

故人が生きていたことを忘れない、あの日あの時のことを忘れないという気持ちで、遺族や大切な人を亡くした関係者は、時に誰かの支えを受けながらも、実にたくさんの営みを続ける。私がこの6年間に、多種多様な活動や自分自身の調査から見聞きし、感じたことの中から、以下では、もう少し具体的に論じたい。ただし、引き合いに出す事実は、個人情報への配慮から、一部変更したものであることをあらかじめ記しておきたい。

①忘れないようにしていること

まず、故人を忘れない暮らしを日常化する。故人が今も生きているかのように暮らす。ある人は、妻が今も生きているように暮らしている。もちろん、妻は現に存在しないので、一緒に行動したり、なにかをしてもらうことは無理であることはわかっている。妻がいるであろう場所を想像し、話しかける。たいていの場合は、仏壇やその近くである。朝起きれば「おはよう」と声をかけるし、出かける時は「行ってきます」と伝える。帰ってくれば、今日は何をしてきたかを報告する。出かける時は「いってらっしゃい。気をつけてね」と返事があるような気がする。仏壇の前で、かつて妻と一緒に練習していた大正琴を弾くと「だいぼうまくなつたわね」とほめられている気がする。

私にも同様の経験がある。私の甥が若くして亡くなった。悲しみにくれる母（故人の母）と私たち家族は、仏壇の前で思い出話をして、さて一緒に夕食するために部屋を出る時に、母は仏壇に向かって「じゃあ、行ってくるからね」と声をかけた。「はい」と返事したのは私の息子だった。後で、息子から話をきくと、俺はそんなことは言ってないの一点張りであった。故人は息子の口を借りたのだと私達は思った。

②故人の思い出の品を保管する

次に、故人の物を保管しつづける。故人の思い出の品を形見にすることはよくある。故人を

忍ぶ親族や親しい知人の間で、形見分けを行うこともある。かけがえのないわが子を亡くした母が、子どもの部屋をその当時のままにしておくということもある。今は亡き母親の指輪を形見にして、付けている人もいる。

写真のアルバムを保存し、映像を編集し保存する人もいる。ある人の場合、故人と撮った記念写真とともに、子どもが好きだったアニメ・ワンピースのキャラクター・グッズを仏壇の周りに飾っている。生前にもっと買ってあげればよかったと思うお父さんは、子どもの思い出と重なるワンピースのグッズを増やし続けている。

津波災害の場合、家ごと被災するケースが多く、記念の写真が残らないことも少なくない。あったとしても数は少ない場合が多々見られる。写真を洗浄し家族に引き渡すボランティア活動が広く行われたのには、大きな意味があった。故人を忘れないためのイメージとして重要だからだ。家は流されたけれども、被災地から離れた親戚や近い知人が写真を提供してくれたり、母校の中学校や高校や支援学校へ行って、卒業アルバムから写していただいている遺族もあった。自分の家にあった結婚式の記念写真は流れてしまったが、その記念の写真を友達にも謹呈していたために、友達がその人の分を戻してくれたという心温まる話もあった。

家は残ったものの、亡くなった家族の部屋に手を付けられないという方は、故人のことを忘れたくないだけでなく、故人の死をいまだ受け入れられないという心境にあり、部屋を片付けることに抵抗を覚えるのである。故人の死を受けとめて生きていくためには、精神のケアや何らかの精神の支えが必要である。

③忘れないための何かのかたち

故人が亡くなったことや、あの日に起こったことをわすれないために、何かのかたちにする場合もある。ある人は家を新築する際に、新しい家の庭に元の家を庭石の一部を移設した。玄関の周りには、元の家には植えられていたのと同じつつじの木を植えた。つつじは大槌町の木でもある。被災した家のタイルをアレンジして、入り口の壁にはつつじの花を描いた。また別の人は、新車を購入した際に、ナンバーを選んだ。「311」である。これらの決断は、大切であった家族を決して忘れないためであり、災害の記憶を失わせないためでもある。

故人の面影を慕って、今はなき故人の肖像画を描く人もいる。被災時の町の様子を忘れてはならないと思い、思い起こした悲しみの風景を絵に描いている人もいる。亡くなった故人を想い、そのお孫さんやおじいちゃんの人形を紙粘土で作った例もある。おじいちゃんの雄姿と笑顔が、その人形からよみがえってくる。

④表象（シンボル）とする

犠牲者を何かのシンボルにしようとする例もある。命がけで避難誘導して犠牲となった人がいる。消防団の自動車や装備にも多大な損害を受けた。そのことを知った全国から、支援として小型ポンプが贈られたので、小型ポンプには殉職した団員の名前をつけたという。

娘を亡くした母は、とある花や植物を観る時に、亡き娘を思い出す。これは娘の花や植物と決めて、ことあるごとに家に飾ることにしている。生前に故人からいただいた植木を大切に育てている人がいる。故人の友人は、その植木を見ると、故人を思い浮かべる。こうした人びとは、故人を表すシンボルを何かに当てはめている。

⑤共同して記録にのこす

災害の記録を残そうという取り組みが、遺族の当事者の範囲を超えて大規模に、組織的に行われる場合がある。太平洋戦争の犠牲者について、沖縄県では幅広く県や各市町村単位で行わ

れた。阪神淡路大震災の時には、数多くの自治体や地区において、また、神戸大学の取り組みなどにより実施された。東日本大震災の時には各地で行われ、岩手県においても、朝日新聞の取り組み、岩手日報の「忘れない」の取り組み、岩手大学麦倉研究室の取り組み、防災都市計画研究所や東京大学窪田研究室の取り組み、そして岩手県大槌町の取り組みがみられる。その意味づけは一樣ではないが、亡くなった方のことを忘れずに記録するということが根底にある。

(2) 供養する

仏様として供養することは幅広く行われている。仏事として以外に、思い思いの営みを続け、それぞれのサイクルで定期的に儀式化し、中長期のスケジュールを定め定式化して行われている。後で述べるように、こうした供養の時には、何らかのリアクションが感じられることがある。

供養するとは、故人の死を受けとめたうえで、故人の仏や魂に、何かのお供えをして、ささげたり、祈ったりすることである。供養をすることにより、故人の魂の安寧を望んだりするものであり、何かのリアクションをもとめるものではないものの、それでも何かのリアクションが感じられることもある。供養する場所は主にお墓であったり、仏壇のある部屋で会ったり、仏壇、位牌、遺影に向かってであったり、過去帳であったりする。しかし、遠方から、お墓や仏壇や位牌の方角に祈りをささげることも行われる。

①故人にしてあげたいこと

お墓には、お花やお供えをする。水を新しいものに換え、故人が喜ぶであろう食べ物や飲み物をお供えする。仏壇も基本的に同じである。毎朝、水を換え、お茶をいれて、手を合わせた。ある人は、亡くなった孫たちのことを思い、乳酸菌飲料や、ごはん、味噌汁、おかず、お菓子などを、毎日お供えしている。乳酸菌飲料は子どもたちが飲みやすいように、ふたをあけてあげている。最愛の配偶者を亡くした方は、最高の物を供えたいと、お供えする物の質にこだわったりしている。

しかし、供養としたい行動の内容が、すべて実行できるわけではない。行為として実行するでもなく、実行してあげたいと思うこと自体も供養になる。ある人は、故人が亡くなる前に寒がっていたことがその後もずっと気がかりで、お墓に布団をかけてあげたいという気持ちを持ち続けている。

②創作すること

故人を想い、故人に手向けるために、なにかに没頭する人がいる。中には、創作に没頭する人もいる。故人がそのことをよろこんでくれる実感があり、その価値に共感する他者が加わると、その営みはある種、神ががってくるような気がする。ある人は、最愛の息子を亡くして以来、家に引きこもっていたが、しばらくして、亡き息子が喜ぶだろうと思い、装飾品を造りはじめた。仏壇のある部屋に飾られた装飾品は、貝殻や、乳酸菌飲料の空きボトルや、リボンや毛糸、自分の所有する山から取ってきた竹などを材料とし、蝶々やトンボ、人形や吊るし雛など、多種多様な作品を創作し展示することで、部屋に彩りを与えている。作品は今や仏間にはおさまらず、廊下や玄関などへと拡張している。息子が喜ぶ供養ができて、自分の気持ちも少し楽になってきたようだ。

③移動を伴う供養

移動する供養もある。まだ学校の生徒である年齢で亡くなった若い死に対しては、その若い

死を悼み、みんなで集合的な取り組みをする。運動会や卒業式の時に、亡くなった生徒の遺影を掲げようとしたりする。家族や友人も、故人をどこかに連れて行こうとする。亡きおじいちゃんに孫に会いたいに違いないと、東京の娘や息子の家まで位牌をもっていき、孫に会わせようとする。別のある人は、旅行が大好きだった故人を想い、故人の写真をもって全国を旅して、写真におさまっている故人に、旅の風景をみせている。故人は亡くなったに違いないが、気持ち的にはもう少し生きさせてあげようという遺族の気持ちが込められた旅供養である。

④お墓まいり、お墓に話しかける

お墓に向かって手を合わせる人もいれば、お墓に向かって、故人の名を呼ぶ人がいる。お墓が近くになくとも、お墓の方向に手を合わせる人がいる。お墓とかを意識しないで、風や雲や海に向かって手を合わせる人がいる。故人は、いつもお墓にいるわけではないと感じている人もいるからである。

(3) 供養の延長としての交流1：夢をみる

以上で取り上げた忘れないための営みや供養するための行いは、遺族側を主体に置いた営みや執り行いである。しかし、夢をみるという行為や体験はどうだろうか。遺族側の意図で、意に即した夢をみるというわけにはいかないのである。そこに映るのは、自分の潜在意識の投影なのか、あるいは何らかの環境や他の要因の作用なのか反作用なのか。遺族と故人との何らかの相互性を思わせる現象や体験のようにも思えるのである。こうしたことから、夢にみることは、故人と遺族の相互性の中で起こる現象や体験の部分を含んでいると位置づけることができよう。相互行為的な意味合いを部分的に含んでいるという解釈である。

①感情を揺さぶられる経験

遺族や、故人と親しかった関係者が、故人が登場する夢を見る時に、感情を揺さぶられることが少なくない。夢に映し出されるのは、過去の懐かしい再現であることも少なくない。夢の中での故人は、遺族のことを案じていることもあり、また心配しないように安心させようとしている節が見当たることもある。

②夢に出てくる故人の様子が気になる

しかしその一方で、夢の中で見た故人の様子から、故人からの何かの意向が示されているのではないかと想像することもある。夢に出てくる故人が悲しんでいるか、笑っているかで、夢をみた本人の感情はゆさぶられたりする。夢に浮かぶ故人の様相から、悔しさがにじんでいたりと、意外と落ち着いていたり、心中をゆさぶられるのである。ただ単に、私たち遺族たちを見守っている様子がうかがえると感じるものもある。

③夢で居場所を尋ねる

夢にみることを強く望んでいる人の中には、いまだ身元確認ができず捜索中の故人に、夢の中で問いかけることもある。行方不明であるということで、もしかしたら、亡くなっているのかも定かでない、遺族はかすかに期待している場合もある。

夢に出てきた故人に対して「いま、どうしてる、どこにいるの」と尋ねる。捜索途中の故人の夢を見たというのがある。行方不明で捜索中の故人が、まちのどこかで立っていて、後日その周辺から遺体が見つかったというものである。ある人は、行方不明の故人が夢に出てきたので、うつらうつらの意識の中で遺族は夢の中の故人に「どこにいるの」と尋ねる。すると、とある場所を指で示したという。実際のところ、そのあたりの捜索は不十分ではないかと遺族は

思っている。もちろん、本当に、指で示したそのあたりで見つかるとは限らない。

④見守り、励ましにくる

故人を亡くして悲嘆にくれている遺族をはげましにくるということもある。悲嘆にくれている遺族の夢に現れた家族は、自分の死を受けとめるようにと、家族をさとしていたようであった。自分のことを心配しているのだろうかと思えるのである。

夢に見たという体験のエピソードを聞いた遺族の中には、自分には出て来ないと嘆く人も見られる。何かの心がけが悪いのかと元気がない姿をみるにつけ、夢に見る遺族と見ない遺族とがいて、それは遺族の心がけとは関係がないと解すしかない。このような体験の有無が、ご遺族の心情を傷つけることになってはならないと思うのである。

(4) 供養の延長としての交流2：気配を感じる

夢ならば睡眠中の記憶であるが、気配となると睡眠中に夢の中で逢うのではなく、実際に感じることであったり実際に見えるという経験であったりする。

①気配を感じる

自分は見えないんだけど、気配はわかるという人がいる。気配を感じるのは、深夜であることが多く、寝ていると枕元に誰かが立っている気がするという経験である。これは、少なからぬ人が経験している。ある人は、見えないけれど気配は分かるという人で、気配を感じる状況になると鳥肌が立ってくるという。

②枕元に立つ

気配を感じるよりももう少し具体的に、近くにいるのがわかるという話もある。夜、寝ている時に、枕元に立つというのがよくある例である。遺族や近親者の様子をうかがいにきたのではないと思われる。ある夜、ある人が寝ていると浜の匂いと共に、津波で亡くなった夫が現れたという。その後、すーっと消えていったというから、様子を見に来たのか、津波で被災したことを知らせに来たのかと思われる。複数の家族を亡くしてひとりぼっちになった自分のところへ、たくさんの家族や親せきの人と思われる人がやって来る様子が分かるという人がいる。深夜に、仮設住宅の玄関ががたがたするのでわかるという。毎日のようにやってくるので、後に玄関の鍵をかけるのをやめたという。

③具体的にみる

具体的に、うっすらと存在がみえる人がいる。男性よりも女性で、大人よりも子どもで見える人が多いように思える。孫たちは、おじいちゃんが来たよと言う。ある人はふだんはふるさとから離れた大都市に住んでいるが、大震災の数日前に沿岸にやってきた。沿岸に滞在していると、亡き父があらわれてもう帰れと言う。あまりに執拗に言うので、早めに帰ることにした。そして、東日本大震災が起こった。家族でなくとも、見る人はいる。津波で犠牲となった海の方へ歩いて行く様子を見かけた人がいる。大槌町旧役場庁舎でコピーをとっている人が見えるという人もいる。

④対話を求めて

亡き故人との対話を求めて、霊媒師のところへ行く人もいる。自分自身には靈感がないとしても、誰か霊能者を介すれば故人と対話ができるという考えである。霊能者を介した故人の反応から、安心材料をえたいという期待があるのかもしれない。岩手県の沿岸からは少し離れた青森県の恐山へ行く人もいれば、近場にいる霊能者を訪ねる人もいる。まだまだ若い子を亡く

した親は、同じ苦難が広がっている石巻市河北地区の大川小学校跡地へ足をはこぶかもしれない。遺族は、何か共鳴するものを求めての巡礼といえるかもしれない。

⑤何かに変わって

故人が何かにかたちを変えて会いに来るかもしれない。何かを知らせに来たのかと思えることがある。3月11日、ぎりぎりのところで津波から逃れて避難場所にたどりついた瞬間に、自分の前を白い鳥が横切った。あれはいったいなんだったのかと考へに考へて、被災した夫の身代わりなのではという思いにたどり着いた。後で考えれば、自分が避難しているその時点で、すでに被災していると思われる夫が、何かに変わって、自分の助かった様子を見届けたかったのだろうかと思えるというのである。他には、仮設住宅で生活している時に、遺族を尋ねてくるかのように鹿があらわれた。このことは何を意味しているのだろうかと常々考へるが、故人が何かに変わって会いに来たのか、遺族の様子をみにきたのかと思われるのである。故人の化身は、昆虫がという例が多く、蝶々が自分の前をひらりと横切ったり、自分に付いてきたように感じることもあるという。しばしば、同じ種類の黒い蝶々を見かけることがあり、遺族は亡き人がまた会いに来てくれたのかとの思いにふける。

⑥みえる人が多く出現

大災害の被災地では、自分には何かが見えるとか、感じられるという人が増えている。あまりにも身近に、多くの方が亡くなるという経験が集積していて、死者との対話が覚醒されたためと思われる。現にこの私自身も、1日の相当の時間をかけて故人や遺族のことに思考や想像を傾注している。ある程度潜在化していた感性が、多少なりとも顕在化してきているのではないだろうかと思えるのである。

霊や魂に関係する感性が活性化されるような機会が増えれば、人びとの他者理解や世間の見方も変容を余儀なくされるだろう。そうしたことがどのような意味を持っているのかも、社会的に思念する必要がある。たぶん、あまりにも世俗化されたグローバルなマナー志向のそしてモノやコンクリート化した世界に重点を置く環境認識とは違った何かが見えてくるのではないか。そしてそこに意味や価値があるのではないかと思うのである。

靈感がある人が顕在化しているのは、この地が才覚の宝庫かということではなく、この地の人たちの感性を呼び覚まし、覚醒させるような大事件が起きて、その結果、それぞれの人がもつ特性に気づいたということかも知れない。そういう意味から、被災地で学び、哲学することは、改めて着目されてしかるべきなのではないだろうか。

(5) 受け継ぐ

死者との対話の例として、故人の遺志を受け継ぐというやり取りがうかがえるケースもみられる。

①故人の遺志として 個人の意向を尊重して

故人の意向を斟酌し付度して、常に、あるいはとくに重要な局面においては、尊重しようという気持ちを持ち続けている人びとがいる。ある遺族は、震災直後から避難所運営に一生懸命関わってきたが、それは、その人自身の考へで、生き残った者として人の助けになりたいと考へたと同時に、津波で犠牲となった妻の意志を受け継ごうとしたものであった。従前の自宅防災計画の中で妻は、災害発生後に避難所運営で炊き出しを担当することになっていた。夫は亡き妻の遺志を汲む気持ちが強かったのである。

②故人の遺志として2 故人の人間性や考え方や生き方を見習って

故人の生き方を見習って生きているという人もいる。遺族は、故人の生き方の価値を再確認し、受けつぐ意志を表明しようとする。例えば、故人は人づきあいを大事にしていたので、そのところを自分も見習っている。故人は、家族を守ってお墓を維持してきた人なので、自分も受け継ぎたいと思うのである。

故人が続けてきた家業を守ろうとする人もいる。しかし、現実の問題として、事業の継続は困難な場合も少なくない。故人を想ってどこまでできるかも、採算が絡めば容易なことではない。住宅を再建して、亡き家族のための仏間を造りたいと述べる遺族もみられる。その通りにできる人もいれば、そこまで無理ができない人もみられる。お墓にしても、人によっては容易な金額ではないので、建立したり、再建したり、移設したりと、故人を想いつつ、遺族は自分の家庭の事情を考慮して対応するしかないようである。お寺の住職からは、生き残った遺族の生活が最優先で、お墓のことはそれからでよいとうかがったという人もいる。

③故人が果たせなかった夢を心にいだいて

故人に対するはなむけとして、故人が追求しようとして果たせなかったことに遺族として取り組みたいという人がみられる。亡き父と一緒に、理想の家を建てるのが自分の夢であった。一流の建具職人の父と組んで家を建てたいと思ったので、自分は大工になった。しかし、自分の理想を追求するのにかげがえのない父を震災を失った。その喪失感と向き合いつつ、自分の理想をどのように展開するか、摸索の日々が続く。

④社会全体の教訓として活かしてほしい

災害による犠牲死を受け継ぐことの代表的な取り組みは、その事実を教訓として活かすことであり、個人こじんが自身の戒めとして継承したりすることもあれば、家族や一族の教訓として継承することもある。また、防災が社会全体で取り組む重要な政策課題であることを考えると、自治体や国家など社会全体における教訓として継承する事柄であるといえる。社会全体の教訓とする場合に、災害犠牲死を検証する視点が欠かせないのである。

(6) 不思議なこと

被災地における遺族は、極端な結果が到来したが故に、あの時のあのことがあればあるいはなければ、自分がこうしていれば、あるいは何かが暗示していたのではないかなどと振り返り、様ざまな思索が交錯する。別の結果がもたらされる可能性はなかったのかと、思いめぐらすのである。

思い起こせば災害の前に不思議なことがあったと、あるいは災害後にも不思議なことが起こったと自身の経験を振り返る人がいる。故人の中には、被災する前に、自分もこれだけ長く生きてと述懐した人がいれば、いままでになく妻にそれまでの感謝の気持ちを伝えたり、通帳や印鑑など大事なもののありかを伝えていたり、自分が亡くなった後の蓄えを意図的に残しておいたりする人がいる。また何かたいへんなことが起こりそうな夢をみたりする遺族がいるなどなどである。被災後に、故人が応援してくれたせいなのか、会社の業績が上向いたりなどなどと感じられる遺族もいる。

私自身も、東日本大震災からこれまで400回ほど、盛岡市と三陸地域を往復し、事故に遭わなかったのは、故人の方がたに見守られているからではないかと常に感謝している。故人のことを思い、運転に気をつけようとしているからではないかと、常づね実感している。大槌町や山

田町へ入る時も、目に見えない方がたに、自分がなんのために来ているかを心の中で伝えようとしているからではないかと思っている。

死者と向き合う日常は、回復する途上の病んだ状態ではなく、あたりしくなった日常を生きる現実そのものである。そうした日常が、広がった状態のなかで、死者と向き合う文化が生まれ始めていたのである。外から来て共鳴し、何かを深めようとしている我われは、死者と向き合うことをすっかり忘れてしまった世界の中にありつつ、被災地での死の向き合い方から再帰的に、持続的な社会を展望する価値観を再構築する手がかりを見出したりするかもしれない。

7. 結果2 生きた証をめぐる2つのケース

(1) 故佐々木悠真さんとご両親：

こうした展開の例をいくつか示そう。中学1年生であった息子を亡くした両親がいる。愛息が学んだ教室を一目見たいと思い立った父は、解体目の校舎に立ち入り、教室に入った。息子が使っていた机はすぐにわかった。メッセージがたくさん書かれていたからである。「ありがとう」「だいすきだ」「なかよくしてくれて・・・」という内容。教育委員会の許可を得て、メッセージが書かれた机のシートを自宅に持ち帰ると、「そうやって思ってくれる人がいることがうれしい」と、夫婦で涙を流した。亡くなった方のことを、周りの多くの仲間たちは、忘れないでいる、吊っているのだ。

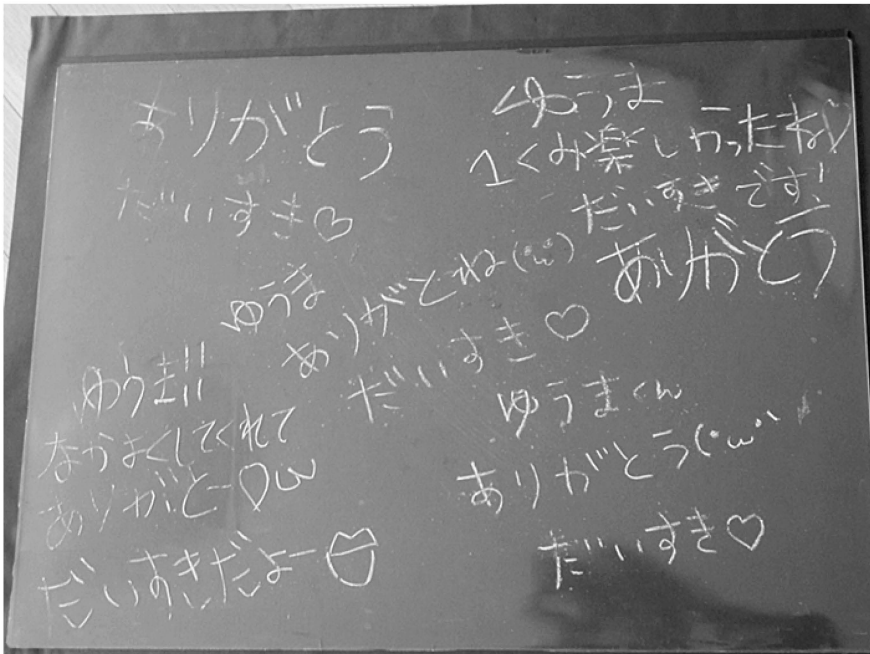


写真1 悠真さんの机のシート

(2) 故竹澤康彦さんとご両親：

あの日、息子の乗った学園のバスは被災した。その日の朝、バスに乗り込んだ息子は、いっなくな「さようなら」と言った。お父さんは、外出をためらうようになった。しかし、ふとし

たきっかけで、装飾品を作り始めた。二枚貝のカラを羽に見立てて装飾した蝶々、貝殻やペットボトルのふたや、ビーズやボタン、様々な色の糸やリボンをあしらった各種のつるし飾り、壁掛け、置物。かつて網を編んだ手先は、装飾品をつくる匠の手となった。息子さんの遺影を置いた仏間兼居間は、みるみるうちに装飾品で彩られていった。なぜつくるのかといえば、息子が喜ぶからである。この場所では、息子さんご両親やきょうだいたちとの対話が、今も続いている。



写真2 故人のお父さんの作品群

8. 結論3

東日本大震災犠牲者遺族にみる死者との対話は多様である。しかし、多かれ少なかれ、死者との対話が続いている。そのことは、犠牲者家族や親密な知人にとって、日常生活の一部分を形成している。この対話を持っている意味や価値については、多様な寄り添い者や交流者や価値支持者が加わることにより、社会的に波及していく効果もある。私も一員であるが、グローバルな社会のもつ負の側面、すなわち物質や経済や軍事が優先され、死者が容易に忘れ去られていく面から考えると、個別の死に寄り添うことこそが世界的に価値ある営みであることを学術的に発信していきたいのである。

むすびに：生者と死者との和解（相互理解）

被災しないで生きている人は、被災して亡くなった方がたと世界を共有して生存しているという面もある。大槌町では被災死した責任を誰かに求めて訴訟が起こることということがなかった（現在は起こされていない）。ある意味で、多分に融和的な社会を形成しているといえるかもしれない。

しかしながら、犠牲となった方がたと犠牲をまぬかれた人びとの間で、十分な相互理解が実現しているとは思えない。私自身が亡くなった方がたの約半数の死の実相のほんの一断面に触れて実感したのは、生き残った人びととしては、寄り添い的に関わることになった人びとも含めて、両者の和解や相互理解のためのステップを踏んでいくことが重要なのではないかということである。それを拒む人はいないだろう。

文献

麦倉哲「東日本大震災にみる被災死と生活困窮—その背景にある社会的脆弱性と格差」日本住宅会議編『深化する居住の危機 住宅白書2014-2016』ドメス出版、186-192頁、2016年12月。
麦倉哲、「津波避難に関する諸課題」一般社団法人岩手県建築業協会『記憶を思いに未来につなげる』、73-75頁、2016年3月。

麦倉哲、「災害の検証が足りない」NPO法人マスコミ市民フォーラム『マスコミ市民』2016年3月号、24-28頁、2016年3月

吉里吉里地区自主防災計画策定検討会『大槌町吉里吉里地区自主防災計画～津波からの避難について～』吉里吉里地区自主防災計画策定検討会・麦倉哲、全32頁。

吉里吉里地区自主防災計画策定検討会『大槌町吉里吉里地区自主防災計画策定検討会の記録～津波からの避難について～一部改訂版』吉里吉里地区自主防災計画策定検討会・麦倉哲、全375頁。

吉里吉里地区自主防災計画策定検討会「＜平成28年版＞吉里吉里地区津波避難マップ」吉里吉里地区自主防災計画策定検討会・麦倉哲、A3版裏表、2016年3月。

麦倉哲、「大災害犠牲者の記録を残す活動の社会的意義に関する研究—岩手県大槌町『生きた証プロジェクト』を事例として—」岩手大学教育学部『岩手大学研究年報』第75巻、31-47頁、2016年3月

麦倉哲、高松洋子、梶原昌五、「東日本大震災被災状況からみた社会の脆弱性とその克服課題—リスク層への支援と脆弱性の克服」岩手大学教育学部附属実践総合センター『岩手大学教育学部附属実践総合センター研究紀要』第15号、37-44頁、2016年3月。

高松洋子、麦倉哲、梶原昌五、「東日本大震災被災状況からみた社会の脆弱性とその克服課題—被災から復興における性差」岩手大学教育学部附属実践総合センター『岩手大学教育学部附属実践総合センター研究紀要』第15号、29-35頁、2016年3月。

麦倉哲、高松洋子、梶原昌五、「被災リスク層の多層化と復興支援課題—岩手県大槌町仮設住宅調査より—」日本都市学会『日本都市学会年報』VOL.49、233-242頁、2016年5月。

麦倉哲、「生きた証プロジェクトのもつ意味や意義—大災害後の歴史的テーマは『すべての犠牲者と向き合うこと』」日本社会病理学会『現代の社会病理』NO.31、5-22頁、2016年9月。

麦倉哲、梶原昌五、高松洋子、和田風人、「東日本大震災犠牲者の被災要因からみた「地域防災

東日本大震災遺族における「死者との相互行為」 —岩手県大槌町での経験を中心に—

- の課題」—大槌町吉里吉里地区自主防災検討のための死亡状況調査から—『岩手大学教育学部教育実践センター紀要』第14号，21—35頁，2015年3月。
- 麦倉哲，梶原昌五，高松洋子，「地理情報システムを用いた津波避難行動の類型化 —岩手県大槌町吉里吉里地区を対象として」『日本都市学会年報』 Vol.48，289—297頁，2015年5月。
- 麦倉哲，「第2章 災害と救援の歴史」「第13章 防災教育の現状と課題」麦倉哲，長谷川洋昭・福島忍・矢野明宏編著『災害福祉論』，23—38頁，193—202頁，青踏社，2015年4月。
- 麦倉哲，梶原昌五，高松洋子，「A r c — g i sを用いた津波避難行動の検証—岩手県大槌町吉里吉里地区を対象として」『日本都市学会年報』Vol.47，317—324頁2014年5月。
- 麦倉哲他『岩手大学調査報告会 山田町仮設住宅住民の復興の現状と支援の課題について —山田町大沢地区仮設住宅調査の結果から』全51頁，2014年6月。
- 麦倉哲・飯坂正弘・梶原昌五・飯塚薫，「大震災被災地域にみられた救援・助け合い文化」岩手大学教育学部『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』，第12号：15-28頁，2013年3月。
- 麦倉哲他『<2012年調査>岩手県大槌町仮設住宅調査結果概要版』岩手大学教育学部社会学研究室，全23頁，2013年8月。
- 麦倉哲，「東日本大震災の被災から復興における「脆弱性」と「社会階層」—暮らしの面と心の平穩の面に焦点を当てて」数理社会学会『理論と方法』，第54号，269—288頁，2013年10月。
- 麦倉哲他，『<2013年2月>山田町大沢地区仮設住宅調査結果概要版』岩手大学教育学部社会学研究室，全31頁，2013年11月。
- 麦倉哲他，『大槌町仮設住宅調査報告会（2013年調査概要）』岩手大学教育学部社会学研究室，査読なし，全32頁，2013年12月。
- 麦倉哲・吉野英岐，「岩手県における復興プロセスと課題」日本社会学会『社会学評論』，2013年12月（特集号 東日本大震災3年目のフィールドから），402—419頁，2013年12月。
- 麦倉哲，「3 被害状況と仮設住宅での生活」岩手大学震災復興プロジェクト『大槌町仮設住宅住民アンケート調査報告書』，18—25頁，2012年3月。
- 麦倉哲他，『山田町大沢地区仮設住宅入居者調査結果報告（第一段）』，岩手大学教育学部社会学研究室，全23頁，2012年7月。
- 麦倉哲，「危険な仕事・任務に誰が就くのか —原発労働者をめぐる隠蔽と分断の一側面」日本社会病理学会『現代の社会病理』第27号，3—25頁，2012年10月。